探究！御柱祭

故きを温ねて新しきを知る

諏訪の風土を代表する神

① 諏訪大社と諏訪信仰

信濃国一之宮諏訪大社は、諏訪湖をはさんで上社（本宮と前宮）と下社（春宮と秋宮）が鎮座している。大正5年に官幣大社諏訪神社、戦後は国家管理を離れ、昭和23年に宗教法人諏訪大社と改正した。

927年の「延喜式」には名神大として宮中から官幣の奉てんに預かり、国内有数の古社である。全国に6500の御分社をもつ諏訪神社の御本社である。ご祭神は神社の明細帳によると次の通りだ。

▽本宮＝建御名方神

▽前宮＝八坂刀売神（建御名方神の妃神）

▽春宮・秋宮＝建御名方神、八坂刀売神、相殿・八重事代主神（建御名方神の兄神）

諏訪大社上社本宮幣拝殿

古くからお明神様・お諏訪さまと親しまれ信仰されている。

「古事記」には国譲りの段に、建御名方神が科野国州羽海の辺まで逃れてきて、この地から出ないことを誓っている。国譲りという日本の国家の一大事に諏訪の神が登場していることは深い意味があろう。

「日本書紀」には691年に、持統天皇が大和国の竜田の風神と信濃国の須波、水内等に勅使を遣して、風雨鎮祭・五穀豊穣・国家安泰の祈りを捧げたとある。朝廷からは命の源である水を守護し、風を鎮める神とみられた。

建御名方神の神名をタケ・ミナ・カタと分けてみると、威力ある諏訪湖の水潟に居ます神とも読み取れ、いかにも諏訪の風土を代表する神のように見えてくる。負けた神とは思えない。

今春の諏訪大社式年造営御柱大祭（御柱祭）は、新型コロナウイルスの影響で山出しがトレーラーによる搬送となるなどいつもと違う点が多い。人力による曳行ができず、物足りなさを感じている氏子も多いかもしれないが、御柱祭を静かに見つめ直す機会ととらえるのも一つの考え方。諏訪大社に奉職した経験がある宮坂清・八剱神社（諏訪市）宮司に御柱の歴史と今を解説してもらう。

宮坂　清（みやさか・きよし）昭和25年、諏訪市小和田生まれ。國學院大學卒業。伏見稲荷大社・諏訪大社・手長神社を経て、令和2年より八剱神社宮司・足長神社他6社を兼務。神社本庁教誨師・諏訪市文化財専門審議委員